

「惑星ラブソング」を鑑賞して

わが広島ユネスコ協会後援の映画「惑星ラブソング」を2回観た。撮られた広島風景が魅力的で、広島市に活動の拠点をもつ時川監督の郷土愛を感じている。演じている俳優たちも、広島にゆかりのある個性ある面々をはじめ、ロスからチェイス・ジグラー、UFO博士役の八嶋智人、悪役の川平慈英など目を引く方々で、物語はモッチとアヤカの日常的なやりとりから始まっていく。次第に過去と未来、幻と現実が混ざり合って、奇想天外な展開となる。

翻って、世界の国々や地域のリーダーたちを見渡してみると、名優揃いである。悪役が結構いるのだが、ポーカフェイスのプーチン氏は極めつけである。ウクライナ紛争を始めて、最近、なぜか安倍元総理夫人に花束をプレゼントしている。自身の裁判の案件を抱えているトランプ氏は、国益優先の考えで国政を進めて芳しくなく、「TACO」と呼ばれてご立腹だ。悪役としてイマイチだが、ここでヒーロー役に転身しては如何か。ウクライナ紛争を止めて、合わせ技でプーチン氏と核軍縮の約束を取り付けてほしい。ついでに、ネタニヤフ氏に度重なる軍事行動を控えさせてほしかった。

パレスチナではハマスが悪いとはいえ、行っていることはホロコーストの裏返しに見えてくる。さらに、イランへの核施設攻撃で交戦状態になるに至っては、役作りとしては行き過ぎである。そこで、石破総理にヒーロー役を買って出てもらいたい。あの、ねっとりとした語り口で、世界を飛び回って、サクサクっと交渉によって争いの種を取り除くことができたなら、まるで、映画「ミッション イン ポッシブル」並みの痛快な出来事となろう。

さて、日本ではこの映画のようなミッションが想定されているかもしれないが、習氏は自国の戦闘機で自衛隊機を追い回しておいて、こちらが「海と空の安全上のリスクをつくり出した。」と言われては辻褄が合わない。台本通りに演じてほしい。ここで、ダメ出しをしておく。

平和を考えさせる映画のファンタジーの中で、広島何気ない日常生活そのものが、ファンタジーなのかもしれない。決して、壊すことなく、世界に届けていかなければならないメッセージがあるはずだ。

映画好きになったオジサン

